

センター つむぎ



目次 2022年9月

子どもの風景 (第7回)	1
子どもと保育園 コロナもひとつのチャンスに	渡部 友紀 2
特集 子どもたちと平和を考える 「平和」のバトンをつないでいくために	伊野 文子 4
沖縄の事実から自分に問いかける授業	藤田 康郎 8
読者の声	13
「季節のたより」創作の秘密	千葉 建夫 14
授業への招待⑦ ねこちゃん体操から集団マットづくりで マット運動の楽しさを	渡辺 孝之 16
教育時評 「こども家庭庁」への大きな懸念	小幡佳緒里 18
わたしの出会った先生	阿部 晃子 30
小野寺さんの「米づくり」実践を読んで	本田 強 21
おすすめ映画	鈴木 吉雄 22
読書のすすめ (第9回)	久保 健 22
相談センター報告 (第28回)	松谷三喜子 23
一言	須藤 道子 24
子どもの風景 作品について	堀籠智加枝 24
センターの動き・編集後記	24

子どもの風景 第7回

マスクはずしたい

かな(小2)

学校でわたしはずすと、
(マスクはずしたい。)
思っている。
家のテレビで、
「マスクは、あとどれぐらいではずせるんですか。」
「2〜3年ぐらいですね。」
と言っていた。

それを、そうくんやりんくん、
りんくんは、
「えっ。」
とおどろいて、
太くんは、
「やばっ。」
と言って、
そうくんは、
「コロナ、何でいんだよ。」
と言っていた。
わたしは、
(みんな、そう思っているんだ。)
と思っただ。
早くマスクをはずしたい。

コロナも ひとつのチャンスに

渡部友紀

2021年度。コロナ禍に翻弄された前年度に引き続き、その感染状況は衰えることはありませんでした。流行のはざままで、もう収まったか、もう収束したかと、つかの間の安心の後、次の波がやってきて、このような状況がいつまで続くのかと落胆と警戒とを繰り返してきました。大きな行事の計画は数か月前から始まりますが、様々な状況を計画段階でシミュレーションしても、直前でそんなものも全部ひっくり返るようなことの繰り返し。感染予防のため気力労力を常に注がなければならぬ状況と、「今、子どものために何を優先し、何を大事とするのか」の観点とで心の中でも葛藤や乖離が生まれる苦しい年でもありました。

朝市センター保育園では、開園当時から「保育者と保護者が子どもを真ん中につながらいおう」をモットーとしてきました。そのため0歳児の赤ちゃんクラスから5歳児の年長クラスまで一堂に会してわいわいと行事を行うことが脈々と受け継がれてきました。

春の遠足では全員で泉ヶ岳の手つかずの自然の空気を感じ、運動会でも単なる運動競技を披露する場としてではなく、その到達に至る過程を全クラスの保護者も事前のお便りで知り、他のクラスの子どものフリーズの姿にも全力で声援を送ったり何分間も見守ったり。そうやって長い年月かけて作り上げてきた「全てのクラスの子どもの名前も性格も育ちも知っている」という状況が断ち切られる行事の中止・縮小は、コロナ感染を予防はし

ても、「人がつながりあう」という、築き上げてきた大きな財産を崩してしまおうのではないかと、何とも言えぬ悲しみと不安を抱かせるものでした。

年中年長クラスのそのこの組で毎年2月に計画していた大きな行事である蔵王自然の家での一泊お泊りの「そり合宿」も、直前の園内でコ

ロナの感染者が出たため軌道修正を余儀なくされました。年度最後、子どもたちが最も楽しんでいるそりすべりを何としてもやり遂げたいという思いで、中止ではなく日帰りにして実行しようと再計画はしたものの、年度末の卒園式を控え雪解けが進む中では実行することが叶いませんでした。

行事の縮小・中止で我慢の保育園生活最後の年を終えようとしている年長児。最後の卒園式は今の状況下でできる限りのことをしたい。しかしながらその中で歌を歌うことはどうするかという話になりました。学校現場では卒業式の校歌斉唱をせず放送で流すものを心の中で歌うところもあるようだ、との話に職員の中に大きな葛藤が生まれていました。



「保育士さんたちが歌うのを聞いていてね」と言って試してはみたものの、その年一年間テーマソングのように歌い続けてきた『にじ』を保育士が歌うと、心の中に到底とどめることはできず、凶らずも全員の大合唱が響き渡りました。それまで封印していたものを解き放つかのような、あまりにものびやかに楽しそうに全力で歌いだした子どもたちの姿に、歌うことは外せないという確信がで上がりました。ならばどう対策する？ 学校の体育館よりも狭い保育室のホールの中、子ども同士の間隔をできるだけ取り、換気徹底、マスク着用なら歌うことも容認できるのではないだろうか、一つ一つ試行錯誤で実行していききました。

卒園式で子どもの育ちの集大成を披露するものの核としてきた「うた」の他、「リズム活動」と「民舞―荒馬」の披露に関しては体を動かすものであることから、マスクは無しで行う方向で練習をしていました。何とかこのまま無事に式を迎えたいと願っていました。卒園式2週間前になって年長児の中から感染者が出るという非常事態に直面。しかも荒馬の時マスクを外して大きな声で「ラッセラー、ラッセラー」と掛け声を響かせていたことで、年長児は全員濃厚接触者となりました。幸いにしてほかの年長児からは感染者が出なかったのですが、卒園式は1週間延期とし、開催方法ももう一度見直すことになりました。

「うた」のみならず「リズム」も「荒馬」もマスク着用か？ との考えもありましたが、これ以上子どもの表情と息遣いを隠し、子ども自身を息苦しくさせることもできない……考えに考え出した結論は、なんと「屋上（戸外）で卒園式を開催する」という前例のない究極の選択でした。3月下旬の気温も天候もどつちには転ぶか分からない中の卒園式。プログラムは吟味され尽くしました。凝縮された中で子どもの姿を最大限に引き出すために、大人の出演（園長の祝辞や例年恒例の保育士からの歌のプレゼント等）はカットし、印刷したプログラムの入れ込むようにしたり、式後に配るビデオの中に映像として残すこととなりました。参列する卒園児の保護者はとにかく着込んで参加してくださいと、こちらも異例のお願い。そして一緒に参加する予定だった



年中児の保護者は階下の保育室でリモートで式の様子を見守ってもらうという、正にコロナ禍で生み出された新たな方法で同じ時間を共有してもらおう参加方法となりました。それまで何週間もかけて卒園式の雰囲気を作ってきた保育室ホールの装飾もメインのじ色の飾りを急遽屋上に移し、シンブルながら子どもが引き出され、その一年をまさに象徴するかのような会場となりました。

卒園式当日は少し肌寒くも子どもたちにとってはいつもの環境と気温、そして空が見える屋上での卒園式は広々としたのびやかな雰囲気を感じられるものとなりました。響き渡る子どもの声が一層早春の空気の中に溶けていくようでした。

一年間、イレギュラー続きで落ち着かない世の中の雰囲気は翻弄されながらも「残念、仕方ない」で諦めず、「じゃあどうする？」と機転と胆力の試される年となりました。子どもたちの口からも「コロナだからしかたないよね……」と悲しい声が漏れることもありましたが、その度に「じゃあどうする？」と今までの前例にとらわれず、自分たちで考え自分たちが本当にやりたいことを厳選して組み立ててきた一年でもありました。そういった意味ではコロナがひとつのチャンスだったと前向きな捉えなおしをするきっかけだったと、完全終息の後にも語り継がれていくのではないのでしょうか。

（仙台・朝市センター保育園）

特集

子どもたちと平和を考える

ウクライナ戦争が始まって7か月、未だ終わりが見えず、毎日のように戦争報道が続いています。いま、子どもたちと「戦争と平和の問題」をどう語り合うか、小学校低学年と高学年の授業プランをもとにした大学の実践、2人の実践から考え合いたいと思います。

「平和」のバトンをつないでいくために

伊野 文子

○子どもたちを育てることの究極は

2022年3月。私のもとへ一通の手紙が届きました。宮城教育大学時代の恩師中森孜郎先生からでした。そこには、「先生の投書」と「先生の投書を読んだ教え子の投書」が入っていました。先生の投書の題名は、「航空隊に志願『大義』どこに」。本文には、「歴史の教師から中国で戦死した杉本五郎中佐の遺書『大義』をすすめられ、天皇のために命をささげることが永遠に生きる道であるという教えに感動し、海軍少年飛行兵に志願。敗戦後は教育学を学び、教師となり、定年退職まで平和教育の大切さを説き続けてきました」ということが書かれていました。先生の教え子の投書の題名は「中森孜郎先生、私も道を貫く」。その方は、「憲法9条や自衛隊について語っておられたことを今でも記憶しています。先生が政治的な問題を高校生に提起する授業を実践されたことの意味が、大学で原水爆禁止運動を学び、(中略)理解できるよう

になりました」と、先生の投書に応じるように書かれていました。

この2つの投書を読んだときに頭に浮かんだことは、大学時代に企画した「中森先生が語る昭和史」で、先生が繰り返し語られていた「天皇の為に戦うことに疑いを持たなかったのは、そういう教育を受けていたからだ」という言葉でした。皇国史観の中で教育を受けた先生が、ご自身の体験を語ってくれたからこそ、私は教師になることを選択し、「平和」や「民主主義」を子どもたちと共に求めていきたいと考えたことを、思い出しました。

あれから、30年以上が経ちました。教育を取り巻く社会状況は、「平和」に向かっているでしょうか。「民主主義」があるでしょうか。2022年2月24日にロシアのウクライナ侵攻が始まり、日本政府は「軍事費10兆円」とか「敵基地攻撃能力」など、ロシアとウクライナの停戦の為に力を尽くすのではなく、日本が攻められてきたらどうするのか、という議論にすり替えて軍備拡張に動いています。2022年7月8日安倍元首相の銃殺と国葬問題は、



政治家と統一教会の問題をあぶり出しているにも関わらず、安倍元首相を国葬にして国民に弔意の押し付けをしようとしています。

教育の究極の目的は、「幸せに生きること」だと思えます。個人の幸せがあつてこそ、集団の幸せがあるのだと思えます。日本国憲法前文には、「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して我らの安全と生存を保持しよう」と決意した」とあります。また、改正前の教育基本法前文では、「われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである」とあります。そのために私ができることは何だろう、と問い続けながら、授業づくりや学校づくりに取り組んでいます。

○絵本『いろいろなへんないろのはじまり』を読む

明星学園は自主カリキュラムで授業を行っています。1年生の新しい教材として、「多様性」や「みんなちがってみんないい」ということを伝えることができる絵本はないかということを探しているとき、『いろいろなへんないろのはじまり』（アーノルド・ローベル作）に出会いました。

「魔法使いが『はいいろのときは、よのなか なにかまちがつとる』」と思い、魔法で色を作りますが、単色しかできません。単色の世界は、最初は良いのですが時間が経つと困ったことが起きてしまいます。魔法使いは新しい色を作りだそうとしますが、自分の力ではどうすることもできません。これまで作った色があふれ出し、偶然色が混ざり合い、いろいろな色ができ上がります。そのいろいろな色を町の人が、どこに何色を塗るか上手に決め、幸せに暮らしました」という話です。

この話を1年生の子どもたちと読むことによって、①人間は現

実を変えるための行動力をもっている。②人間は、同じ色・傾向の人間だけでなく、いろいろな個性をもつ人間がいるから、世界は豊かになるし、面白い。ということ伝えたいと考えました。

2022年1月下旬から、一人1冊この絵本を手にして授業を始めました。新型コロナウイルス感染拡大で、2週間の自宅学習になり、その期間は自宅で保護者と一緒に、この絵本を読む課題を出しました。保護者の方からは、「アーノルド・ローベルさんの絵が細かく描かれていて、絵を見ているだけで面白かったです」とか「深い内容ですね」という感想をいただきました。

学校が再開して、いよいよ授業。授業時間数10時間で読んできました。絵本と出会った子どもたちの感想を紹介します。

・さいしよは はいいろとか いろいろだったけど、まほうつかいが かんがえて、いろをつくって、そしてあおいろをつくって、ずっとあおでずっとあおだったら、みんながあきちゃって、きいろをつくってみたら、またみんな あきちゃって、こんどは、あかをつくってみて、またあきちゃって、どんどんくりかえして、さいごに、にじいろをつくったら、みんな、なっとくして そのままで、せいかつしたんだね。(H)

・さいしよはしろくろだったけど。まほうつかいがさいしよに、あおいろをつくった。いっぱいいろをつくって、つぼにぜんぶはいらなかつたから、あふれているがまじって、いろができたのがすごかったです。(M)

子どもたちは、魔法使いが色を作っていく様子や色が混ざった場面に心を動かしていることが分かります。

毎時間、一人ひとりが絵本を開いて、「絵から読む」ことをしました。「はいいろのとき」であれば、白と黒の世界を「なんだかさびしいそう」「お城がある！」「鳥が飛んでる！」「崖の上の人がいるみたい！」と、それぞれ見つけたことを発表しました。「お話を読む」では、「世の中何か間違つとる、って魔法使いが

言ってる！」「魔法使いが言ってるみたいに、晴れてるのか雨が降っているのか分かんない！」「それで色を作ろうとしたんだね」「魔法使いって、すごいね！」「呪文を唱えて色を作る魔法使いは、いろいろなることを知ってるんだね」など、絵と文が語っていることから、魔法使いの人物像を話し合いました。

魔法使いが最初に作った色は「青」。その「青」を屋根に塗っている、近所の人たちがやって来て、色を分けてほしいと頼みます。魔法使いは「もちろん、あげるとも」と言っ、その色を近所の人たちに分けてあげます。近所の人たちは、全てのものを「青」で塗ります。「あおいろのとき」の始まりです。最初は「あおいろのとき」を「よいながめじゃ」と言っていた魔法使いでしたが、やがて、町の人たちも魔法使いも悲しい気持ちになり、ふさぎこんでしまいます。絵と文から子どもたちは、描かれている人も鳥も猫も木の葉っぱも悲しそうにしているのを見つけました。

魔法使いは、「なんとか、しなくちゃ」と、新しい色を作ります。次にできたのが「黄」。同じように近所の人たちに分けて、近所の人たちが全てのものを「黄」で塗ります。最初は良かったのですが、しばらくすると、町の人たちも魔法使いも目がチカチカして頭が痛くなります。絵と文から子どもたちは、「鳥がぶつかってる！ 目が見えないからね」「人もぶつかって、リングを落とってる！」「豚もニワトリも目が細い！ まぶしいんだね」と発表しました。

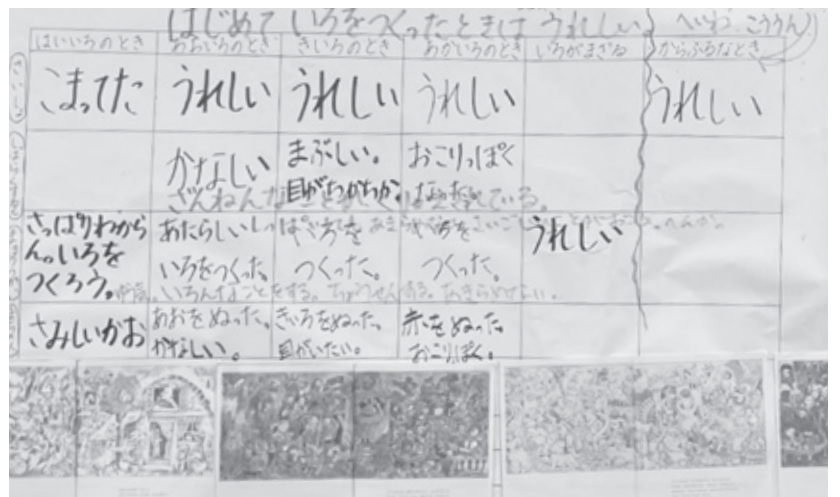
魔法使いは、「なんとか、しなくちゃ」と新しい色を作ります。次にできたのが「赤」。近所の人たちは魔法使いから「赤」を分けてもらい町中を「赤」で塗ります。最初は良いのですが、しばらくすると町の人たちはケンカを始め、魔法使いの家を目がけて「こんな、とんでもない色をつくったのは誰だ」と石を投げつけます。絵と文から子どもたちは、「雷が鳴ってる！ 雲も怒って

る！」「屋根の窓が、怒ってる人の目みたいになってる！」「兵隊が戦ってる！」「お城から大砲が出てる！」など、自然も人も怒っていることを、沢山見つけました。

魔法使いは、「なんとか、しなくちゃ」と毎日毎日色を作りますが、でき上がるのは「青」「黄」「赤」ばかり。それらの色が、あふれかえって偶然混ざり、いろいろな色ができました。偶然が新たな色を生み出したことを魔法使いが喜んでいる様子

子が、絵でも文でも表わされています。子どもたちは、「魔法使いが、色をいっぱい作ったから、あふれて混ざったんじゃない」「語り手は、大変！ 大変！ って言ってるけど、魔法使いは、これじゃ、これじゃって喜んでる！」「色が混ざって、グルグルしている！」「ネズミが、色をかき混ぜてたスプーンにしがみついている！」「色があふれておぼれちゃうもん」「魔法使いは喜んでる！」「やっといろんな色ができただから、うれしくてうれしくてしようがない」と、魔法使いの願いが叶ったことを自分のことのように喜んでいました。

いろいろな色ができ上がり、魔法使いは近所の人を呼び、それらを全て分けました。近所の人たちは、みんなで、それらの色をどこに塗るか話し合っ、決め、色とりどりの世界ができ上がります。



した。絵と文から子どもたちは、「うわー！カラフル！」「虹色の世界！」「キスしてる！」「凧揚げしてる！」「釣りしてる！」「踊ってる！」「みんなニコニコ！」「幸せそう！」と、大興奮でした。

最後に、子どもたちの感想を紹介します。

・まほうつかいが あきらめないで がんばったから いっぱいいろができた。まほうつかいが いっぱいいろをつくったから

おれもまほうつかいみたいになりたい。(Y)

・まず、わたしが一ばんこころにのこったことは、まほうつかいは、みんなが そのいろをいやがったとしても、また あたらしいいろを つくったことがこころづよいとおもいます。あと

まほうつかいが できた はいいろのばめん、まほうつかいは、「よの中なにかまちがつとる」といって、きづけたことも、すごいとおもいます。ぜんぶ、うまくはいかなかったけど、でも、さいご からふるなときに みんながにこにこしていて

Kだったら、とてもうれしいです。まほうつかいも うれしいとおもいます。(K)

子どもたちは、単色の世界ではなく、多色の世界が幸せなのだということや、「世の中何か間違つとる」という怒りが、現実を変える原動力になることを、この絵本と出会って、感じたり考えたりしたのではないかと思えます。

このような、日々の授業の積み重ねが、子どもたちの心に平和の種を蒔いていることになるのではないかと思えます。

○「へいわのたねをさがす明星学園の会」の立ち上げ

現在は過去によってつくられます。遡って、第一次安倍内閣で2006年教育基本法が改悪され、第二次安倍内閣で2013年特定秘密保護法が強行採決。第三次安倍内閣では2015年安保法強行採決。9月19日のあの日、国会前のデモの中に、私もいました。『戦争法案反対』の集会やデモに、本校の教職員、退職

教員や卒業生、在校生、保護者の方々がたくさん参加しました。「SEALDs」に、卒業生が参加するなど、それぞれの場所で、「民主主義とは何か」「立憲主義を守ろう」と立ち上がりました。

2016年9月、1年前のうねりを一過性の出来事として終わらせたくないという思いで、同じ志をもつ教職員や保護者、退職教員に呼びかけて、「へいわのたねをさがす明星学園の会」(「たねの会」)を立ち上げました。

立ち上げてから6年。「福島原発に関すること」「原子力爆弾に関すること」「沖縄の歴史に関すること」「東京大空襲に関すること」などを柱に、映画の上映会や講演会、福島のもち米でつく餅つきなど、年に3回ほど会を開いてきました。2020年3月以降、新型コロナウイルス感染症パンデミックにより、集まることが憚られてからは、オンラインを利用して講演会を開催してきました。

今年、既に2つの講演会を実施しました。そのうちのひとつ、『すべての道は「ヒロシマ」に通じる?!』アメリカの詩人と東京の若者が核心を語る『アーサー・ビナード(詩人)×田原ちひろ(明星学園高校卒業生)』を紹介します。

アーサー・ビナードさんは、写真絵本『さがしています』(童心社)や『ドームがたり』(玉川大学出版部)、『原爆の凶』から触発されて制作した紙芝居『ちっちゃいこえ』(童心社)など、ヒロシマに関する絵本をたくさん書かれています。田原ちひろさんは、本校の高校に学び、「東京高校生平和ゼミナール」(平ゼミ)の中心メンバーとして、核兵器禁止条約に署名・批准を求める署名活動やウクライナ侵略に抗議する活動を、全国の高校生と共に展開し、現在は大学生になり、東京学生平和ゼミナールの結成に奮闘しています。このお二人に、縦横無尽にヒロシマとの関わりについて語っていただきました。アーサー・ビナードさんからは、プロパガンダについて話がありました。ちひろさんからは、平ゼミでの活動報告がありました。感想を読んでいたくと会の様子

が良く分かっていただけだと思います。

「ちひろさんのお話もアーサー・ビナードさんのお話も、とても興味深く深遠なお話で、平和とは、そして、私たちが生きるとは何かを立ち止まって考える機会になりました。ちひろさんたちのように行動し、意見表明し、学ぶ高校生は、とても素敵です。ウクライナやロシア大使館に行っても変わらない……平和運動もプロパガンダに利用されてしまう、というお話もありましたが、一筆一筆の署名を5000筆集めること、そこで一人一人に語りかけることは、まさに身近で現実的な行動で、署名をしてくださった方々の思いを大使館に届けることは、その思いを大切にされた未来を拓く一歩です。それは、ビナードさんが、ご自身の生き方から絵本を作り、紙芝居を作り、私たちにペテンとは何かという話を語ることと違いはないと思います。その昔、世界中から署名を集めてストックホルムアピールを市民が発信したことで、ベトナム戦争中のアメリカ軍が原爆を投下できなかったと言われています。

沖縄の事実から自分に問いかける授業

藤田康郎

(東京・明星学園小)

す。ちひろさんたちの、小さな一歩が、やがて世界を動かす大きな力へつながるのではないのでしょうか。卒業してからも、是非、学生平和ゼミナールを立ち上げて、世界を変える小さな一歩、頑張ってほしいです。その時に、ビナードさんの今日のお話のきつと真実を見つめる、掘り下げる栄養になるかもしれませんね。(略)

このようなことの積み重ねが、足元から「平和」をつくることに少しでもつながるのではないかと考えています。そして、中森先生から学んだことを、私なりにつないでいきたいと思っています。

この紙面を読んでくださり「たねの会」に興味をもってくださった方は、ご連絡ください。→ heiwatanemyojo@gmail.com
私たちを取り巻くいろいろなことを「自分事」として捉え、学び行動していきたいと思っています。

はじめに

私は東京にある私立和光小学校を2021年3月に退職し、現在は大学院で学んでいます。

和光小学校は、成城学園での事件(成城事件)をきっかけに、

袂を分かつて飛び出した保護者たちによって1933年に創立されました。大正自由教育の流れを汲み、子どもを中心とした教育を創ってきました。1974年には総合学習を取り入れ、教育づくりの土台に総合学習を位置づけました。中でも1975年から取り組んだ総合学習ヒロシマは、被爆者と子どもの交流を中心



に証言を直接聞き取り、感じることを大切にしてきました。一方で、都市化・近代化の進む広島市内での学習について丸木政臣校長や当時の教員たちは平和学習の限界を感じ、アメリカ軍の核戦略の中核であった沖繩への変更を検討し、1987年から沖繩学習が始まりました。

昨年、知人の大学での授業にゲストとして招かれ、授業をさせてもらいました。和光小の「歴史の事実を知り、生き方と結びつける学習」を学生に紹介・体験してもらいながら授業を進めることにしました。知人からは事前に「かつて日本政府・軍が朝鮮を植民地化したことで戦後の韓国の復興に役立った、植民地支配は悪くはなかった」という感想を書く学生がいる」との話も聞きました。

近現代史を軽く扱う傾向や入試の出題範囲に含まれないこと、教師自身が近現代史をあまり知らないという実態を反映しているのでしょうか。

一方で、植民地支配に対する日本政府の姿勢も大きな要因です。政府はこれまでの教科書にあった「従軍慰安婦」の記述を「慰安婦」とする、と閣議で決定しました。このような教育内容への権力の介入を背景にして、インターネット上に植民地支配を肯定する論調や、日本軍「慰安婦」問題をなかつたかのようにする書き込みが増えてきました。大学生の中に、先に挙げたような論をそのまま受け止める者がいたとしてもおかしくはありません。

大学の授業では、和光小の6年生に行つた授業をもとに戦後の沖繩と日本社会のあり方について考えることにしました。

以下では、大学での授業を紹介することで、和光小の平和教育（歴史の事実を知り、生き方と結びつける学習）の一端を知っていただくとともに、大学生の感想などから、今の若者たちの意識や認識、そして私たちの授業づくりの課題についても考えたいと思います。

授業の計画 社会概論（全15回）の一部11回、14回を担当
（ア）第11回授業「時事問題を通して現代社会の動きを知る」

（2021・12・16実施）

「一枚の写真から戦後の沖繩の様子を考える」

沖繩の戦後史はあまり知られていないだけに、嬉野京子さん（報道写真家）の1965年宜野座村で撮影された写真を取りあげる

（イ）第14回授業「社会参加を促す社会科とは」

（2022・1・20実施）

前回の授業から考えたことをもとにさらに考える

授業の実際

（ア）「一枚の写真から戦後の沖繩の様子を考える」

〈授業のねらい〉

①沖繩の戦後史を取り上げること、米軍統治下の沖繩では県民は人権も自由も奪われていたことがわかる。同時刻の本土では憲法のもとで、人権は尊重されていたことと比較して、当時の沖繩の状況を知る。

②戦後すぐは米海兵隊の基地は全て本土にあった。しかし、騒音、事故、事件などが頻発することで反対運動が激化し、米軍統治下の沖繩へ基地を移設したことがわかる。

③アレン・ネルソン（元米海兵隊・VFPメンバー）の手記から、海兵隊員が洗脳され、殺人マシーンとして訓練を受けたことを知る。

〈授業の概要〉

和光小学校6年の授業で取り上げた内容を紹介しながら、嬉野京子さんの写真を配り、学生に考えさせました。「この写真

について聞いてみたいこと、気づいたことがありますか？」学生たちは食い入るように写真を見つめていました。学生からは、

・ここに写っている日本人？は、何をしている人なのか。
・横たわっている女の子は死んでいるのか。
・路上にタイヤ痕があるので、車で轢いたのか。
などの質問が出ました。子どもたちの場合は、もつと多岐にわたる質問が出ていました。

学生の一人は、真ん中に立つ兵隊が吸いかけのタバコを持っていることに気づきました。女の子の生死、麦わら帽子の日本人について、路上のタイヤの跡、などの解説を加え、この写真をどのような経緯で撮影し、フィルムの行方について、そして、嬉野さんがどのようなようにして沖繩に来ることができたかを話しました。

和光小学校では写真を使った授業をして、聞いてみたいことを明らかにしてから嬉野さんに来ていただいています。嬉野さんのお嬢さんが和光小出身ということで毎年話をしてくれま



1965年宜野座村 撮影：嬉野京子

当時の沖繩は、米軍を撮影することはもちろんカメラを持ち込むこと、ジャーナリスト、宗教関係者、教師の入域（沖繩への渡航）を禁じていました。

嬉野さんは、行動を共にしていた祖国復帰大行進の実行委員会からは撮影を止められますが、頼み込んでようやく撮影を許されます。しかし撮るのは1枚だけ、フィルムは実行委員会に引き渡すことを条件にシャッターを切りました。この写真は秘密裏に本土に渡り、報道され、米軍が沖繩で何をしているのか、県民の置かれた状況が伝わることになりました。命に代えてでも写真を撮りたいという嬉野さんの気持ち、世界に米軍支配の実態を告発することにつながりました。

写真が撮影されたのが1965年であることで、当時の本土と比べて考えてもらいたいと伝えました。本土では前年に東京オリンピックが開催されていました。続いて普天間基地ができる前の豊かな村の映像¹と、海兵隊は戦後すぐは本土に基地が置かれたことで、神奈川や岐阜、石川での反米基地闘争の激化によって沖繩に移設された映像²を見てもらいました。

〈学生の感想〉

A 女の子が米軍の車に轢かれてしまっている写真では、あの写真が残っていることが奇跡的であるということに驚きました。報道も自由にさせてもらえず、20年以上も支配されていたことは、どんなにつらいか、想像することもできません。これまで歴史を学んできたことはありましたが、ここまで具体的に学んだことはなかったので、過去の現実を受け止めることは大切であると気付かされました。

B 私は、どこか、大学に入る前まで、沖繩についてのことは他人事のような気でした。しかし、大学で沖繩出身の同期や先輩と出会い、他人事ではとてもいられないと思うようになり

ました。沖縄とアメリカの関係については今後もちろんと知っていき、自分ごととして考えることが大切であると思いました。また、前回、韓国を日本が占領していた話をやっていたと思いますが、沖縄（日本）の人から見るアメリカ人と、韓国人から見ると日本人は同じような感じだったのかなと思いました。占領している側は、相手国の文化、人権、誇りなどお構いなしという感じでした、という部分はアメリカも日本も同じだと思いました。このことから、日本も自国がやってきたことに関して、考えるべきだと思いました。

感想を読むと、これまで具体的に学んでこなかった、どこか他人事だった、という言葉があります。他にも無知であったことに気づいた、という感想はたくさんありました。本土では憲法によって少くも国民の人権は守られるようになってきているというのに、沖縄の人たちの人権は米軍によって踏み躪られていたという事実は大学生にとって衝撃だったようです。

また、Bのように日本による朝鮮での植民地政策について感想で触れる学生がたくさんいました。前述の植民地政策を肯定した学生は、支配される人々の実態を具体的に知る機会になったようで、「植民地支配がここまで酷いとは知らなかった」と書いていました。

この授業で質問・疑問が39個出ました。質問には私が考えた回答をつけ、印刷し配布しました。

- 1 NHK特集「基地に消えた私の村 普天間」
- 2 NHKスペシャル「シリーズ日米安保50年 第二回平和の代償」2010

(イ)「前回の授業から考えたこと」をもとにさらに考える」

〈授業のねらい〉

①沖縄が置かれた位置について本土との関係から捉えるこ

とができる。

②沖縄の問題を自分に引きつけて捉え、どうしたらよいかを考えることができる。

〈授業の概要〉

前回の疑問の1つを提示し、グループで討論させました。

沖縄の戦後は多くの問題があったと思います。これは戦後、昭和の頃だけの問題ではないと思います。現在も米軍基地が数多く残っています。なぜ沖縄だけがそのような扱いなのか、そして80年前、悲惨な戦争が沖縄の地で起こったという事実が決して忘れることなく、考えていく必要があると思います。

この問いを読んでみなさんはどう考えますか。

討論の結果を代表に発表させました。

- ・米軍基地が沖縄にあるのは地理的な理由がある
- ・戦後の事件や事故は減ったかもしれないが、今でも続いているなどの意見が出ました。

そこで「東西冷戦構造」について補足説明しました。

次に沖縄に対する具体的な差別の一例として大阪府警から派遣された機動隊員による「土人」発言問題を伝えました。

最後に、辺野古新基地建設をめぐる県民投票の実施を求める署名運動についてDVDを視聴しました。

C 私は高校まで沖縄に住み、沖縄の学校で教育を受けてきました。しかし、授業内で問われた「なぜ日本にある米軍基地の70%以上が沖縄にあるのか」という問いに対して、地理的要因以外の回答をすることができなかった。今までそのような問い

を持ったことも学校で問われたこともなかった。沖縄出身と大
学で言うと、羨ましいと言われ、差別はもう終わったと考えて
いた。しかし、現在沖縄に基地がある現状が無自覚だとしても、
沖縄への差別意識を物語っていると痛感した。

D 県民投票で辺野古の埋め立てに対して、反対が大多数となっ
た。その結果を安倍さんが受け入れない姿勢を示していたこと
を初めて知った。安倍さんに対して「なんで？」と思うと同時に、
自民党を選んだのは私たちなんだよなあ、と思った。選挙の時
に自分に関わる事柄だけを見て、選んでいたが、どうなの？っ
て感じる。

E 私は、正直、沖縄を差別していると言うような認識はありま
せんでした。しかし、今日の授業を通し、初めて知るようなこと、
そして、自分はあまり意見を持っていなかったことに気づかさ
れました。沖縄についてあまり興味を持っていない、このこと
も見方を変えれば差別だったと感じました。これからは、一人
の主権者として投票に参加することはもちろん、知ること、興
味を持つことから始め、行動したいと改めて思いました。

学生の感想を読むと、沖縄に対する差別は基地を押し付け続けて
いること、そうした政権を選んでいることに気づいたというものが
大多数でした。自分は意識しないまでも、事実を知らないことが差
別につながっているということに気づいたと書く学生もいました。
最後に授業を振り返って、書いたレポートを紹介し、現在の歴
史教育の課題について考えます。

F 私自身、自分の親類の中で戦争経験者や戦没者が多く、その
話を聞かされて育ったため、幼い頃から戦史には興味を持って
生きてきた。しかし、私の持っているものは単に概要的、形式
的な知識であり、それをそこから「伝えていく」「学習のきつ
かけを作る」ということは考えたことはなかった。そのため第

7回から11回の戦争を取り扱った授業内容は、私にとつてかな
り刺激的であり、社会科、歴史を教える指導者という立場を目
指そうという自分が、今何を学んでいるのかを実感すること
ができたように思える。「過去の事実を、学ぼうとしなければ、
見つめようとしなければ、風化して文字通りの歴史になってし
まう」という中学校時代に社会科を3年間担当してくださった
先生がおっしゃっていたのを思い出すと同時に、この5回の授
業を通してその意味を理解できたような気がした。(中略)沖
縄戦がどのような戦争であるか、概要を知っているからこそ、
戦禍の中を生きていた人々や戦後の沖縄を生きていた人々のあ
る種「生々しい」現実をよくは知らなかったことに気がついた。
社会科という教科は、絶対に人間の生活と切り離された内容を
学ぶことはない。特に歴史の分野は時間の流れや人のつながり
を強く感じさせる要素がある。それなのに、あまりに他人事で
はないかと目覚めさせられたように感じた。

3 都島伸也監督『話そう基地のこと、決めよう沖縄の未来』
ロングラン 2019

授業の考察 成果と課題

この授業では知らなかったことに気づかせるというねらいは達
成できました。そして、戦後の沖縄の人々が人権を蹂躪され、命
さえ奪われる事態に見舞われていたという事実を知ることによっ
て、かつての日本が朝鮮をはじめ多くの植民地で行ったことの意
味を知ることになりました。さらに、沖縄の問題は他人事だった、
という言葉がたくさん見られることから、沖縄の問題は日本全体
の問題であることに気づき、これまでの自分の生き方を問うこと
につながりました。

別の視点で高校までの社会科の授業はどうだったのか、という

読者の声

いつも楽しみに読んでいます。想像以上に子どもたちと一緒に学び合うことが困難な状況が進んでいるを感じています。

議会の中では“ICTこそが……”という論調が強く、政府に言われるままに、マイナンバーがこれでもかと言う勢いで進められ、ついに若い市長は、「高齢者のバス運賃は、スマホを利用する人に限り、無料にします」と信じられないようなことを平気で言う始末です。正面から反対するのは私たちだけ。負けられません。

(戸津川晴美さん)

現職中から継続している「太白区合同親の会」も、今年27年目です。四半世紀！不登校の子ども達を前にした時、親の姿が鏡に写し出されるように、問い直しをさせられています。最近は、ご夫婦での参加、祖母祖父世代の参加の方、コロナ禍で動きが少々楽になれた子など、対面での会が再開できています。

(北村志津枝さん)

ロシアによるウクライナ侵攻から4か月経過。一方的な攻撃で国土は荒廃、人民は避難民に。欧米各国からの支援？ 武器供与を受け、ウクライナ軍は反攻を続けています。

そんな状況下の世界は、経済がガタガタに、特に物価の上昇が著しい。そして、軍備増強による抑止力を持たねば侵攻される……と戦争論を持ち出し、軍備増強と先制攻撃を言い出す始末。

日本国憲法は、武力を持たず戦争しないと誓ったはず。どうしても、強さを持たねば……という弱者の理屈がわからない？

(高橋利昭さん)

「学ぶこと」学びのある授業、それには「問いと答えの間」「個を重ね合わせた授業」「知ることは、感じることの半分も」という「子どもの成長・発達を見守る」ことが欠かせないし「子どもと共に学び続ける教師」であること学びの同士であり共に創り上げることが大切だと思います。

学びに直結することが書いてあり、何度も身につつまされながら読ませていただきました。

特に、今回「米作りから考えてきたこと」は個人的にも我が意を得たりの思いで読ませていただきました。初めて2年生を担任した時からコメ作りの授業を、退職の時まで地域の方の協力をいただき行うことができました。私は宮教大卒ではありませんが、岩浅先生の本に惹かれ、宮教大の市民向け開放講座「都市と農村」「食」「農業」「生きもの」に関連したものを受講するのが夏休みの恒例になっていました。

授業では学校の近くの田畑を調べたり、近郊の学校では畑と土地をアパートにした場合と収入の違いは、聞き取りや役所、店、市場で調べたり、もうからなくてもなぜ農業をと歴史や、食を外国から買うことで賄っているのかなどの疑問と考えをまとめたりしました。2年生の子も5年生の子も深く考えてくれました。共育だと思ったし、地域の方々に学び、学校を出て現場で現物で現地の人から学ぶことの大切さを学びました。

(大沼敏幸さん)

点を考えてみます。この大学に入学してくる学生の多くは小中高と優秀な成績を収め、学級委員や生徒会などでも活躍してきたと考えられます。今回の沖縄の授業では、初めて出会うことばかりという体験になりました。沖縄のこともある程度知っているつもりが、1枚の写真を通して「無知」を思い知らされたことが多くの学生の言葉から伝わってきました。そして、多くの学生の言葉にある「自分のこととして考えてこなかった」という点は、小中高と受けてきた教育が、どこか他人事であり、自分の問題として捉えるような内容を持つものでなかったことを意味します。つま

り学生たちは、学ぶことと、自分の生き方や課題意識はつながっていなかったのでしょうか。Fの言葉の中には「人間の生活と切り離された」とありますが、学校教育の中では、生活し人々の生きざま、という視点がどれほど意識されてきたのでしょうか？ 現在の歴史教育、社会科教育の課題が見えてきました。学生たちは歴史の事実を通して自分について考え始めていました。学ぶことと生きることを結びつける姿をそこに見ることができ

(東京・元和光小学校)

季節の草花への想いー千葉建夫さんに聞く

「季節のたより」創作の秘密

当センターのホームページに『日記&ブログ』があります。その中に多くの方が楽しみにしてくれている『季節のたより』の連載があります。センター運営委員の千葉建夫さんが季節の草花を写真とエピソードで紹介してくれています。その連載が100回を超えました。そこで、千葉さんにその創作の秘密を伺いました。

— いろんなことを考えながら「季節のたより」を書いているのですか

教育現場にいた頃、「オオバコ」（季節のたより11）を教材に授業をしたことがあるんです。オオバコは根も葉も茎も丈夫だから踏まれても平気。校庭や道端など人の踏みつける場所では、多くの草花が踏まれて死んでしまふのにオオバコは分布を広げています。

オオバコの種子は、ぬれるとネバネバの液を出し靴や車にくっつき運ばれます。こどもたちはオオバコ遊びが大好きだから、靴についた種子をあちこちに運び分布を助けているんです。オオバコの弱点は、人に踏まれなくなる。人の入らない草地では他の草花の成長が早く、日かげにされてしまう。それで弱って消えていく。これが自然のしくみです。

その自然の不思議さを一緒に考えたくて、オオバコをひきぬいて遊んだり、種子のネバネバを確かめたりしてオオバコの暮らしを考える授業をしたら、子どもたちは夢中になりました。オオバコに限らず、他の植物にもそれぞれ独自のしくみを備えてこの地上で生きています。「季節のたより」では、その季節に咲く花を紹介しながら、植物たちの知恵のようなものを探ってみたいと考えました。

また、草木たちの花を見ていてわかったことは、その季節に花を咲かせるために1年前から周知な準備をしていることです。途中を端折ったり、ごまかしたりしない。生きることに誠実です。アオキ（季節のたより46）などは、4月に昨年からの実を成熟させながら、同時に今年の花を咲かせています。大変だと思うけれど、淡々とそれをこなしています。それぞれの植物たちの独特の個性に魅かれるので、自分の好きな花、知っている花から読んでもらって、何かひとつでも発見があつて、そこからその花とのつきあいを深めてもらえたら嬉しいです。「季節のたより」の写真をながめて、こんな花があつたのかと楽しんでもらえるだけでもいいのです。

— たくさんの写真が使われていますが、どのように撮っていますか

写真は散歩や山歩きのとときにデジカメを携帯、とにかく興味をひいたら何でも撮っています。その画像を後で植物ごと整理したものを使用しています。

植物図鑑の写真や絵は、その植物らしさがわかるものが掲載されていますが、全てではありません。植物の一生は種子が芽生えて成長し、花を咲かせて実を結び、枯れ落ちるまで変化し続けています。その姿は図鑑や絵本などでは語りつくせないほど多様で豊かです。

『タンポポ』（季節のたより49）で紹介した大宮学級の2年生の子どもたちは、絵本『た



アオキ

んぼぼ』（平山和子ぶん・え・福音館書店）を教材に学習しながら、自然界のタンポポを見つけているうちに「絵本」に書いてあることと違う事実が気がついていきました。

自分の目で自然を見ることがとても大事で、写真を撮ることも自分の目で見た記録のひとつです。その時はたった一枚ですが、何年か撮り続けた画像を並べてみると、自然界でのその植物の一生や生きる姿が見えてきます。時間をかけてものごとを見ることの大事さを感じます。

また、撮影時間は早朝か夕方、斜めからさしこむ自然光が、植物たちを美しく見せます。木の葉などは逆光で見ると世界がきれいです。正面だけでなく、いろんな角度から眺めてみます。腹ばいになって虫の目でネジバナ（季節のたより32）を撮っていたら、らせん形につく花は八チがどこから飛んできても見えないようになっていたと気がつきました。



ネジバナ

— 撮影中のエピソードがありますか

早春には若葉を食べるニホンカモシカと必ず遭遇します。カモシカはふつう襲ってくることはないのですが、たまたま鉢合わせ、よほど驚いたのか追いかけられました。

栗駒山で高山植物を撮影していたら、ヤマネやテンが黒くて丸い目で不思議そうにじつとこちらを見ていました。こちらも森の生きものになった気持ちでした。

北泉ヶ岳と栗駒山では熊に遭遇、一瞬黒いものが目の前を横切っていったのには胆を冷やしました。宮崎学さんの『森の探偵』（垂紀書房）を読んだら、熊は人間の行動をかげからじつと見ていて、熊も人に会いたくないからやり過ぎしてから出てくるというんです。森に一旦入ったら、けものたちの領域です。「森に入らせてください。」と熊鈴をならしたり、ホイイ、ホイイと大声を出したりして自分の存在を知らせています。

— 最後にお話ししたいことがありますか

地球を生きものたちが生存できる環境にしたのは、およそ5億年前、最初に海から地上に上陸した藻類を起源とする植物たちでした。太陽エネルギーと水と二酸化炭素を材料に栄養分を合成できるのは植物だけです。人を含めたすべての動物は植物の働きのおかげでいのちをつないでいます。植物は二酸化炭素を吸収して酸素を出し、それが生物の呼吸を支え、大気の組成を維持し、気温上昇（温

暖化）を抑える役割をしています。

生きものは、土、水、空気存在とともに自然の循環のしくみのなかにあり、人もそのなかで生かされてきました。でも人は自然を利用することだけ考え、自らの生存環境を壊しつつあります。このまま続けるなら生物学的に対応できなくなるときが必ず来るでしょう。授業で取り組んでほしいのは、自然との共生を語るのではなく、自然の摂理を学ぶことです。子どもたちが自然の声に耳を傾けられる人間に育ってほしいと思っています。

つきあいを深めてもらえたらうれしいです。

「季節のたより」の魅力……………

唯一無二の植物図鑑

菅井 仁

2018年1月から月2回のペースでスタートした千葉さんの書く「季節のたより」には、たくさんの魅力があふれています。取り上げた植物の一生を、美しい写真でとらえていること。次に植物の名前の由来や、植物が生きながらえてきた仕組みなど固有の知恵の説明には感嘆するばかりです。特筆されるのは、その植物に関連する文学作品や短歌、俳句などを紹介していること。そして何よりも「子どもと教育の場面での活用例」が記述されていること。まさに唯一無二の植物図鑑といえるでしょう。ぜひ、ホームペー



ねこちゃん体操から

集団マットづくりでマット運動の楽しさを

渡辺孝之

マット運動をはじめとする器械運動は、多くの子どもたちから「痛い」「怖い」と敬遠されがちです。どう教えたらよいかと悩む先生に指導のポイントを紹介します。

1 指導に当たって

小学校の器械運動のカリキュラムを考える際には①マット運動 ②鉄棒運動 ③跳び箱運動の順番で指導するようにします。共通する基礎技術「体幹コントロールを伴う手足の協応による支持回転技術」はマット運動で習得するのがより容易で、それを鉄棒やとび箱に転嫁させます。マット運動では側方倒立回転（側転）を中核の技として、連続技の創作・表現を楽しませます。側転の習得は低学年でも可能です。早い時期からのほうが表現の世界が広がります。

2 「ねこちゃん体操」で

体幹コントロールを

「ねこちゃん体操」は器械運動に共通する体幹コントロールの感覚を身に付けるために考案されました。埼玉県小学校教師、山内基広さんが、限られた指導時数の中で高学年でハンドスプリングをできるようにさせるにはと考えて作りしました。

基礎的な体幹コントロールには、あふり（勢いをつける動作）、はね、しめ、ひねりの4種があります。ねこちゃん体操を漫然とやるのではなく、ねこちゃん体操の動きが、器械運動のどの場面で使われるのかを意識して結びつけることで技の習得に結びつけることが大

事です。例えば、「ねこちゃんが おこった」は前転初期動作と一致します。また、「アンテナ」は台上前転でのおおむけでの足の位置の把握に役立ちます。私は「アンテナ」の指導と同時に「アンテナ・前転・立つ」「アンテナ・後転」も合わせて指導していきます。

※ 学校体育研究同志会ホームページ (taiiku-doshikai.org) からねこちゃん体操の動画が視聴できます。

3 連続技の学習

①動物歩き

動物歩きは低学年から高学年まで楽しみながら必要な動作を身に付けることができます。動作を「お話」にすることで自律的に動作をコントロールすることができま

す。ポイントは、①腰が肩よりも高くなる ②首を起こして手と手の間を見る ③手のひらを床に付けて体重を支える。これを同じグループの子どもがマットの横に座って一人一観点を分担して見るようにします。

どんな動物にするか、ポーズをどうするか、などをグループで考えさせることが表現の創造に発展します。低学年ならとても楽しく



「はじめます」
「はいどうぞ」

「くまさんがやってきて」
(動物歩き)

「こんにちは」 (首振り)
「こんにちは」 (首振り)

「さようなら」 (前転)

「はいポーズ、1、2、3」
(バランス技)

学習できます。

② 大また歩き前転
側転の学習に向けて、視線が急激に大きく移動することに慣れさせます。

4 側転の学習

① 「ぞうさん」で足の振り上げをマットを重ねて高くして、「ぞうさん」の歌に合わせてゆつくり足を振り上げ下ろします。動物歩きで学習した体を支える動きが役に立ちます。慣れたら始めに振り上げた足と後から上げた足を入れ替えて着地します。



「大また 歩き」



「ぞうさん」

「前転」
「ハイポーズ」

② 「ぞうさん」から徐々に横移動をマット状にスポンジで作った棒を置き、「ぞうさん」に徐々に横移動をとり入れます。横移動をどんどん広げて直線にしていくと側転の完成です。

よく見られるつまずきは、手手足足の順番が同側（右手右足もしくは左手左足）にならないことです。片方に靴下を履くなどして意識できるようにします。また、着地で膝やす

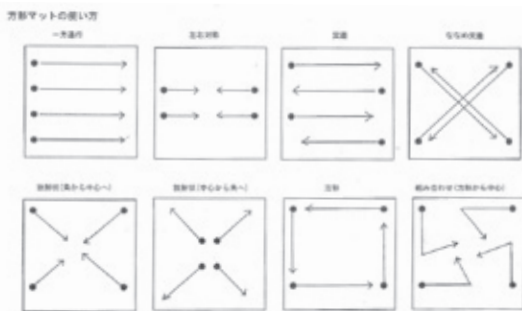
ねを着いてしまいい立てない子もよく見られます。その場合には、足の裏で着地すること、着地後手を空中高く上げてそこを見ることが体を引き上げることなどを指導します。

5 集団マットつくり

側転までできるようになったら集団マットに取り組みます。自分たちで演技を考える学習では子どもたちの学びに向かうエネルギーはけた違いになります。



今回6年生の曲は「翼をください」。選曲の基準は、子どもたちがよく知っている、拍が明確、テンポが遅いなどです。『翼をください』は教科書教材でもあり最適です。今回は、『歌の森6』教育研究社CD



をテンポを遅く（85程度）再生して流しました。1番を8小節×3パートで2番までで6グループで演技します。1つのグループで8つの演技を組み合わせればよいのです。空の動き方の基本パターンを示し、自分たちの演技を考えます。

マットを組み合わせて大きな正方形を作ります。フロアに同じ面積の正方形をコーンなどで作り、マットを使えない時間でも練習できるようにします。

フィニッシュは全員が登場してポーズを作ります。

今までは違うマット運動が楽しめます。どうぞ、チャレンジを。

参考資料

山内基広『ねこちゃん体操の体幹コント
ロールでみんながうまくなる器械運動』

創文企画

山内基広『ねこちゃん体操からはじめる
器械運動のトータル学習プラン』創文
企画



（東松島市・鳴瀬桜華小）

「こども家庭庁」への

大きな懸念

小幡 佳緒里

こども家庭庁の創設により、これまでの縦割り行政を一元化することができ、抜けや漏れのない、迅速な対応を実現することができる、とされています。

確かに、抽象的には縦割り行政を一元化することによるメリットはありそうです。

しかし、後記のこども家庭庁の概要をみる限り、子どもに関する政策が十分とはいえないことは、いわゆる縦割り行政に問題の所在があったとは感じられません。縦割り行政が問題なのではなく、子どもに関する政策を充実させ、深め、必要に応じて対応部局が連携していくことが重要なのであって、それらを実現するために、こども家庭庁というものが必須ということではないように思います。

他方で、こども家庭庁が創設されることは、政府にこれまで以上に教育への介入を許すことになるのではないかと懸念を強くします。

こども家庭庁は、内閣府の外局として設

置するとされています。内閣府、その長たる内閣総理大臣に、権限が集中、拡大していくこととなります。子どもに関する政策が、官邸主導で進められることになり、特に、学校教育の内容に対する不当な介入の危険が大きくなる、と思えてなりません。

「こども政策の新たな推進体制に関する基本方針」によれば、教育については、「教育基本法において人格の完成と国家社会の形成者の育成を目的とする旨が定められており、その振興は文部科学省の任務とされている。

文部科学省は、初等中等教育、高等教育及び社会教育の振興に関する事務を一貫して担っており、この教育行政の一体性を維持し

つつこどもの教育の振興を図ることは、こどもの成長を『学び』の側面から支えて行く上で重要である。このため、教育については文部科学省の下でこれまでどおりその

充実を図り、こども家庭庁は全てのこどもの健やかな成長を保障する観点から必要な関与を行うことにより、両省庁が密接に連

携して、こどもの健やかな成長を保障することとする。」とされ、教育については文部科学省の所管としつつ、こども家庭庁も「密接に連携」するとしています。

今後、「こどもの健やかな成長」という大義名分のもとで、学校教育の内容に、政府が不当に介入してくる事態が生じることになるのではないかと強く懸念します。

さらに、こども家庭庁の「企画立案・総合調整部門」では、デジタル庁と連携して、子ども・家庭の状況、支援内容などに関するデータベースを整備する、ともされています。

子どもや家庭の状況等のデータベース化というところに、「GIGAスクール構想」を想起させます。

子どもに関するデータの集積は、内閣府、その長たる内閣総理大臣による子ども・家庭の監視と支配を生むことにつながりかねません。

このような監視と支配が、子どもの利益に資するとは到底言い難く、こども家庭庁の創設は、懸念材料が多いものと言わざるを得ないものだと感じています。

参考までに「子ども家庭庁」の創設とその概要をまとめてみました。

1 「こども家庭庁」の創設

2022年6月15日、「こども政策の新たな推進体制に関する基本方針」（2021年12月21日閣議決定）に基づく「こども家庭庁設置法」及び「こども家庭庁設置法の施行に伴う関係法律の整備に関する法律」、そして「こども基本法」が衆議院本会議で可決され、成立しました。

「こども家庭庁設置法」により、2023年4月1日に「こども家庭庁」が創設されることとなります。

2 「こども家庭庁」の概要

内閣官房こども家庭庁設立準備室によれば、「こども家庭庁」の概要は、およそ以下のとおりとされています。

(1) 目的

常にこどもの最善の利益を第一に考え、こ

どもに関する取組・政策を我が国社会の真ん中に据えて（「子どもまんなか社会」、こどもの視点で、こどもを取り巻くあらゆる環境を社会全体で後押しする。そうした、こどもまんなか社会を目指すための新たな司令塔として、こども家庭庁を創設する。

（2）設置

内閣府設置法に基づき、内閣府の外局とする。

こども家庭庁の長は、こども家庭庁長官とし、あわせて、こども政策を担当する内閣府特命担当大臣を置く。（なお、当然のことながら、内閣府の長は内閣総理大臣である。）

（3）こども政策の基本理念

① こどもの視点、子育て当事者の視点に立つた政策立案

② 全てのこどもの健やかな成長、Well-beingの向上

③ 誰一人取り残さず、抜け落ちることのない支援

④ こどもや家庭が抱える様々な複合する課題に対し、制度や組織による縦割りの壁、年齢の壁を克服した切れ目のない包括的な支援

⑤ 待ちの支援から、予防的な関りを強化するとともに、必要なこども・家庭に支援が確実に届くようプッシュ型支援、アウトリーチ型支援に転換

⑥ データ・統計を活用したエビデンスに基づく政策立案、PDCAサイクル（評価・改善）

（4）特色

① 強い司令塔機能

内閣総理大臣の直属の機関として、内閣府の外局に置き、これまで別々に担われてきた司令塔機能をこども家庭庁に一本化し、就学前の全てのこどもの育ちの保障や全てのこどもの居場所づくりなどを主導する。

② 法律・事務の移管・共管・関与

主としてこどもの権利利益の擁護、こどもや家庭の福祉・保健等の支援を目的とするもの（子ども・若者育成支援推進法、子ども・子育て支援法、児童福祉法、児童虐待の防止等に関する法律等）はこども家庭庁に移管し、こどもの権利利益の擁護、こどもや家庭の福祉・保健等の支援とそれ以外の政策分野を含んでいるもの（学校教育法、いじめ防止対策推進法等）は他省庁との共管とする。

国民全体の教育の振興等を目的とするもの（教育基本法等）は、関係府省庁の所管としつつ、個別作用法に具体的な関与を規定するほか、総合調整を行う。

（5）体制

内閣総理大臣、こども政策を担当する内閣府特命担当大臣、こども家庭庁長官の下に、内部部局として「企画立案・総合調整部門」、「成育部門」、「支援部門」の三部門で構成する。

① 「企画立案・総合調整部門」

・ 各府省で分散していた子ども政策に関する総合調整機能を集約し、子ども政策に関する大綱を作成・推進。

・ 必要な支援を必要な人に届けるための情

報発信や広報等。

・ データ・統計を活用したエビデンスに基づく政策立案と実践、評価、改善（デジタル庁と連携して、子ども・家庭の状況、支援内容などに関するデータベースを整備等）。

② 「成育部門」

・ 妊娠・出産の支援、母子保健、成育医療等

・ 就学前の全てのこどもの育ちの保障（幼稚園・保育所・認定こども園、家庭、地域を含めた取組の主導、未就園児対策等）

・ 相談対応や情報提供の充実、全てのこどもの居場所づくり（子ども・若者総合相談センター、子育て世代包括支援センター、子ども家庭総合支援拠点、地域子育て支援拠点の充実、放課後児童クラブ、子ども食堂、学習支援の場などの様々な居場所づくり等）

・ こどもの安全（子どもの性犯罪被害の防止、事故予防、子どもが死亡した経緯を検証するCDR（チャイルド・デス・レビュー）の検討等）

③ 「支援部門」

・ 様々な困難を抱えるこどもや家庭に対する年齢や制度の壁を克服した切れ目のない包括的支援（地域の支援ネットワークづくり、児童虐待防止対策の強化、いじめ防止及び不登校対策（文部科学省と連携）等）

・ 社会的擁護の充実及び自立支援

・ こどもの貧困対策、ひとり親家庭の支援
・ 障害児支援

（センター運営委員・弁護士）

私の通っていた小学校は木造校舎でした。小学校3年生の時、放課後になると教室掃除をして、その後に必ずすることは、床の木が痛まないように磨きます。担任の白石先生から「ぬか」が配られて自宅で布袋を作った中に「ぬか」を入れた後は、もれないようにしっかりと縫いませます。これで自分の手作りの床磨きの掃除用品が完成です。ほうきで掃いた後は、クラスのみんで一列に並んで、床磨きをします。みんなで掛け声をかけて「1、2、3、4、10」10回磨いたら次の場所にすすみます。

木なので、ささくれとかも気にしながら同時に、私たちの教室内の安全点検もできるわけです。白石先生は床磨きの様子を、目を見開いて見ていて、掛け声が小さいと「もっと大きな声で」「10回までちゃんと数えた？」と檄を飛ばします。内心はいちいちうるさいなと感じたものですが思い返すと、意識して自分から周りと声を合わせること、自分の声が小さいと周りが合わせる事ができないこと、真面目にしないと床磨きが終了しないことで協調性の大切さを学べたと思っています。

中学校に入学して、社会・斎先生のお話とても楽しかった。砂漠で暮らす人たちのびっくりするような成人の儀式的紹介やいろいろな民族のこと、どれも興味深かったです。

ある日、先生が悲しい顔で、「人類が歩んで

きた歴史の中でいつまでも完結しないものがある」「それは戦争です。今もベトナム戦争をしている。僕は、世界中どこを見回しても戦争なんてない時代が来ることを強く願います。」と話され、この言葉は強く私の心に刺さりました。私は幼少の頃から戦争中の出来事を母からよく聞かされてきました。それは、防空頭巾を被り、弟をおんぶして、両手のバケツに水を汲んで防空壕に逃げたこと、食べるものもなく苦しかった体験でした。その状況が斎先生の話からよみ

わたしの出会った先生 37

出逢いは明日からの夢のはじまり

阿部 晃 子



がえりました。

日本国憲法の戦争の放棄第9条と国民の権利及び義務の第25条は暗記することが宿題でした。授業中に何も見ないで発表し、試験には必ず出題されました。私たちが忘れないように創意工夫してくれた大切な授業でした。

その後、私は新設の県立高校に入学しました。当時2つの新設高校が開校され、私が通う高校はまだ建設途中だったため、校舎が使える状態のもう一つの高校に通いました。自宅から1時間半以上かかる山の上にありました。クラ

スは2つの高校分12クラスありました。私はバレー部に入学して、顧問の藤原先生と部活に使用する体育用品を他校と一緒にもらいに行きました。体育館はできておらず、グラウンドでの練習。バレー経験がない藤原先生が、グラウンドでドラム缶に乗って、アタックを一生懸命に打ってくれて、レシーブの練習をしました。足は擦り傷だらけでした。年度途中で体育館が完成し、レシーブの練習の度は足は水ぶくれです。でも楽しかったです。新設校のため順位は、最下位

ランク10部からスタートでした。公式試合での実践をつうじて1年後には5部まで上がることができて、部員みんな喜びました。

学年主任の田中先生が、学校の思い出を残そうと計画を進め、12本（全クラス分）の楓とツツジをクラスごとに植樹しました。のちに私たちの学生生活の様子を書いてくれた石碑も作られました。46年経った今も、12本の楓の木は正々堂々と校舎の前でみんなを見守ってくれています。

私が育った学生時代は、関西で過ごし、夜の10時に有名塾帰りの中学生で阪神電車が満員になっていた状況でした。その中で、いろいろなことを思い悩みながらも、素敵な先生たちに出会えたこと、一緒にいた仲間との関わりが今も大切な宝物です。

（特別支援学校寄宿舎指導員）

小野寺勝徳さん（つうしん107号）の

「米づくり」実践を読んで

本田 強

はじめに

私たちが毎日食べている米、人間が生きていく上で必要な米はどのようにして作られるのか。毎日食べる米は安全・安心で、美味しい。子どもたちと実体験しながらの小野寺先生の教育実践活動について学ぶ機会を得ました。種をまき、苗育てから田植え、100日以上かかるイネ作りは気の抜けない大変な仕事の中で、イネの分げつ能力を引き出す安全・安心のイネ作りについて栽植密度を変えることで実現したのでした。

※分げつは、分けつのこと

1. 分げつの秩序性

イネの分げつ増加には一定の秩序性があります。株を構成する何枚かの葉身は同時に伸長する同伸葉とさらに、各葉身は同じ周期性を持つて伸長するという2つの要素から成立しているのです。たとえば主稈の第6葉は、主稈第1葉の内側から出る1号分げつの第3葉、2号分げつの第2葉、3号分げつの第1葉と同時に伸びる同伸葉の関係にあり、また、それら葉身の伸長成長は同一周期性を示すというものです。そして、株を構成する個々の分げつ茎は、上述の秩序性の繰り返しによって増加するのです。

2. 疎植条件とは

そこで、疎植と云う条件はなぜ何が好適なのでしょう。その一つは、地上部空間の問題です。イネは太陽光を葉で受け止めて光合成をおこないます。

小野寺さんの疎植とは、畦間が30cmで、株間も30cmの正方形植えです。したがって1株の占有面積は、900cm²。すなわち900cm²に1株（個体）の苗が植えられますから1m²では11・1株植えとなります。

一方、密植とは、畦間25cm×株間15cm＝375cm²。375cm²に1株（個体）の苗が植えられますから1m²では26・6株植えになります。したがって、面積当たり植え付け株数は、疎植区11・1株植え対、密植区26・6株植えです。から密植区は疎植区の2・4倍の密度で植えられると云うことになります。それは疎植区ほど1株当たりの太陽光は多く受けるということになります。

また、地下部の根についてですが、根が主として伸長する根域は深さ30cmとみなしますと、その根域は、100cm×100cm×30cm＝300000cm³となります。したがって、疎植区の1株あたり地下部

の株容積は、300000cm³÷11・1株＝27027cm³となります。

一方、密植区のそれは300000cm³÷26・6株＝11278cm³で、密植区の1株当たり地下部の株容積は11278cm³ですから疎植区のイネは密植区のイネの2・4倍の土壌容積の元で生活していることとなります。それは窒素をはじめ各種養分等が疎植区で2・4倍も多い条件のもとで生活しているということであり、その結果として株密度が高くなると考えられます。

以上みたように、疎植区の地上部空間は密植区の2・4倍の太陽光線を受け、地下部からの土壌容積（地下部容積）は疎植区の場合、密植区の2・4倍ということになります。

以上のように疎植区は密植区に比較して、地上部空間と共に地下部からの各種養・水分等の供給が潤沢であり、それらの反映の結果として疎植条件のイネは密植稲に勝る生育をしているということになります。

3. おわりに

小学校高学年では、イネの草丈や茎数を定期的に計測し、その結果を図などに書き、イネの一生涯を図上でみたり疎・密の関係を年次比較することで気象の影響について確認する等も、やってみてほしいことの一つです。

ともあれ、子どもたちはお米を食べていても、米作りの疎植（手植え）と密植（機械植え）によってどんな違いがあるか、考えたことはないと思います。小野寺先生のような子どもとの実体験を踏まえた学びを通して、ぜひ「農業問題」を考えられる子どもに育てていってほしいと思います。

（元宮城教育大学教授）





おすすめ映画

鈴木吉雄



Coda くあいのうた

2021年

Codaとは「Child of deaf adults」の略語で、「ろう者を持つ親の子ども」の意味だ。そして、今担任しているのは難聴学級だ。そんなこともあって、以前からCodaという映画に惹かれていた。

主人公のルビーは、両親、兄との4人家族で自分だけが健聴者である。小さいころから通訳としての役を果たし、生業の漁業でも欠かせない存在である。と、同時に歌が好きであり、歌を生きがいに人生を歩もうとする娘と家族の葛藤が描かれる。

観ていて驚いたのは、聞こえない家族全員が本当のろう者であるということ。これが、とても自然にスクリーンの中で活躍していて、役者として素晴らしいハーモニーを奏でている。そこに主人公の健聴者ルビーは、手話ができて、心から震わせてくれるような歌声も届けてくれる。この4人でなければ、この映画は成り立たない。とても美しい作品で心が洗われた。



映画で伝えたいのは、人間讃歌なのだと思う。父親役のトロイはインタビューで「私たちは、ただの人間だ。私たちは手話で話しているということだけ。それだけの違いです。」と言う。子どもたちも様々な違いの中で懸命に繋がろうと成長していく。そういう人間として美しい姿に、心が震える。相手が攻撃してきたから反撃する能力を持つとか、作戦と称して戦争を仕掛けるそういう人たちに声を大にして言いたい。

「懸命に生きている人たちと共に繋がれ、笑顔になろう！武器も武力も要らない！」

(角田市・北郷小)



読書のすすめ(第9回)

久保 健

おすすめBOOK

『あふれでたのはやさしさだった』

寮 美千子 著 西日本出版社 2018年

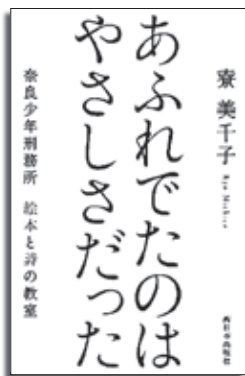
本書は、副題に「奈良少年刑務所絵本と詩の教室」とあるように、作家である著者が、首都圏から奈良に移住して出会った奈良少年刑務所(明治期の赤煉瓦の建物)で、「物語の教室」(月1回、6ヶ月間)に10年間取り組む中で起きた出来事が綴られている。

この刑務所には、17~25歳までの受刑者がいる。窃盗、強盗、殺人、性犯罪、放火、覚醒剤などの事犯で服役している彼らは、ふつう「凶暴な人」「ならず者」「生まれつきの異常者」「理解不能のモンスター」などと思われる。この教室は、その彼らと「表情カード」を使って「今の気分をいう」ことや「自分のいいところを語る」ことから始まり、「絵本や朗読劇を役割をきめて朗読することや、まどみちお、金子みすゞなどの詩を朗読し・聴いて・感想を語り合うことへと進む。しかし、そうしているうちに、彼らにほんとうに必要なのは「彼ら自身の言葉」であり、それを「分かち合う」ことであることに気づき、彼ら自身が詩をつくり、朗読し、それを聴いて感想を語り合うことがこの教室の主な内容になっていった。

その中でどんな奇跡が起こったのか。無表情の子、異常に気の弱い子、ふんぞりかえってえらそうにしている子、意味不明の笑顔を浮かべている子、場面緘黙やチックの子、発達障害の子、性同一性障害の子、一見しっかりした能力の高い子……そんな子たちが、詩をつくり、朗唱し、それを聴いた仲間たちが感想を語る……そうして自分を表現し、それを聞き取られ、批評される(共感や賛同だけでなく反論も)中で、彼らの鎧が崩れ、症状が治まり、心がひらかれた時……「あふれでたのはやさしさだった」のだという。

本書には、ここで起きたたくさんの奇跡の物語があふれている。この教室は「絵本を読んだり、詩を書いたり」するから「物語の教室」と名づけられたのだが、同時に、受刑している子どもたちが生きてきた物語を取り戻し、交流し、書き換え、紡ぎ直すことがなされているから「物語の教室」なのだと感じた。その個々の物語に触れる余裕はないが、その奇跡を起こしたのは、言葉の力、詩(芸術)の力、そして仲間と支える大人たちの力だったことが伝わってくる。

私は、本書を、優れた生活綴方教育の実践記録を思い浮かべながら、また特に、かつて中森敦郎さんと仙台の女子少年院の表現の授業に行った時のことを思い出しながら、何回も何回も繰り返し読んだ。読者のみなさんにも本書をぜひ手に取ることをすすめたい。



親の気持ちに寄り添って

みやぎ教育相談センター相談員 松谷 三喜子

これまで、不登校や学校生活、子育ての悩みなどの相談を受けてきました。不登校に関しては、学習不振、自信喪失、友人関係や教師への不信感など、きっかけとなる出来事や理由は様々ですが、共通して言えることは、なんとか頑張ってきたが、もう頑張れない、ゆっくり休みたいという心の悲鳴です。登校拒否をすることで、自分の抱えている問題や課題をひとりで背負いきれなくなり助けを求めているのです。親は子どもの突然の変化に戸惑い、叱咤激励して何とか登校させようとしますが、子どもは言葉では言い表せない感情を親にぶつけ、親子の関係も悪くなり、やり場のない思いで相談の電話をかけてきます。親は現象面だけを問題にし、見えない課題に目をそらしていることが多々あります。相談員として親の気持ちに寄り添い、丁寧な話を聞くことで、見えない子どもの悩みや課題を一緒に考えてきました。時間をかけて話していくうちに親自身の課題も見えてくるのです。

Aさんは中学生の息子さんからの暴言と暴力で困り果て、知人の紹介で面談をしました。Aさんは、言葉を発すること、涙ぐみながら自分の子どもへの関わり方を責めていました。父親の転勤で転校を繰り返して、環境の変化になじめず、教科にも苦手意識があり、進学への不安を抱えているようでしたが、「こうあるべ

き」という圧迫感といらいら感を物や母親のAさんや弟に当たっていました。身の危険を感じ避難したこともありましたが、実のところ、過干渉の母親への反発と甘え残しのはざまでのSOS発信のようで見えました。単身赴任の父親の協力で無事卒業、高校入学へとこぎつけました。人間関係や苦手な教科の単位を落とすなどでつまずき、欠席がちとなり、高2で不登校となりました。留年か退学かの選択を余儀なくされ、本人の意思を確認して通信制の高校に編入し、父親は地域の不登校親の会に参加し、不登校への理解を深めていきました。

Aさんには衣食住の基本的なこと以外は、本人に任せ、信じて待つ心構えで、おおらかな気持ちで向き合い見守るよう助言しました。時々近況を知らせていただいていた。担任から、高卒後のことや進路のことについて、親は関わらず本人に任せてほしいと言われたこと。父親は親の会に参加してから変わってきた。息子を尊重するようになったこと。息子は両親の関係を観察し違和感を持っているようだ。母親の自立が課題ですと明るく話していました。今年の4月、「今までご支援いただき感謝しております。おかげさまで高校を卒業し、引き続き英検の勉強をしています。最近は声を荒げることもなく読書や水泳など好きなことを見つけてながら穏やかに過ごしています。」と知らせてくださいました。A

さん自身が地域の中で子どもたちに関わる仕事をする傍ら、教育や子育ての学習会や語る会に参加し、自分育てをしてみました。良き妻、良き母の呪縛を解きほぐし、自分が生き生きと明るく、居心地の良い安心感のある家庭をと努力してきました。自分を語り共感してくれる仲間

の存在もAさんを応援してくれました。子ども自身が「いきづらさ」を抱えていることが根底にあります。一番身近な親の向き合い方が、子どもたちの生き方の方向性を左右するのではないのでしょうか。子どもの成長発達過程で親が配慮したいことは、他人と比べず、子どものありのままの存在を認め、それぞれの時期の「喜怒哀楽」の感情や思いを受け止めて安心感を与えることが大切です。親が変われば子どもも変わります。そのためにも、子育てを孤立させない親へのサポートが、今こそ必要だと思います。

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL 022-272-4152

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・
家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日をのぞき10時から17時

〈土曜：10時から15時〉

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間、休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。

「主権者教育」を問う

須藤 道子（センター運営委員）

7月に行われた参議院選挙の投票率は48・97%。最も低いのは20歳から24歳の22・79%であった。投票率の低さは深刻だが、中でも若い人たちのそれについては、「教育に問題があるのではないか」「主権者教育はどうなっているのか」と指摘されることも多い。そうした世間の批判は、主権者教育というものをかなり狭義に捉えていると感じてきた。

私は「主権者教育」とは、自分の人生の主人公は自分であること、自己決定権が優先され、常に自分を主語に物事を考えることが当たり前になる「教育」、ひいては人権教育ではないかと考えている。それは教育の目的である「人格の完成」とも通底する。

しばらく前に手にした、スウェーデンの日本と言う社会科学の中学教科書は「あなた自身の社会」と名付けられており、そこで大事にされていることは多々あるのだが、スウェーデンの学習指導要領には「自分自身の意見をもつことを徹底して奨励」し、「社会は自分たちの手で変革できることを教えること」とあり、学校の果たすべき任務は「生徒に将来を築くという困難な事業への楽観的な展望を与ええること」とあった。ちなみにスウェーデンにおける各種選挙の投票率は80%を超えているという。

子どもの風景「作品について」……堀籠 智加枝（宮城作文の会）

本音を書く＝言葉にすることで力が湧いてくる

「今思っていること、本音で書いてね」と言ったら、かなちゃんはこの詩を書きました。「マスク外したい」「早くコロナ禍が終わって」それは、日本中の子どもたちが願ってやまないことです。この詩を書いてから1年6か月、マスク付け始めから数えると、2年6か月。願いを叶えてあげられないもどかしさを感じます。詩に書いても、本音を形にしても、なかなか実現できないことは多いです。でも、黙っているよりは「言葉」という形にすると力をもつような気がします。「そうやってほしい」「いつか実現するぞ」そんな気持ちが形をもちます。（それが自分に力をくれることもあります。）

「地震がこわかった」「かわいがってきた犬が死んじゃった」「お父さんに遊んでほしいの、寝てばかりいる」「転んだら友だちが助けてくれた」そんなことを、詩や日記に書きみんなで読み合います。読み合うことで、一人じゃない気持ちになります。「見えないもの」や「その子の感じたこと」を形にすること、確かにあったもののなかに、言葉にしないと消えてしまう、忘れてしまうこと、それを消えないように形に残し、みんなで読み合わせるって、幸せな時間です。

センターの動き

〈6月〉

25日 『教育』を読む会、研究部会

27日 ゼミナールsirube「ヤスパール」

ス 1回目

〈7月〉

8日 第4回事務局会

9日 「教育のつどい2022」第2回実行委員会

16日 『教育』を読む会

23日～24日 「明日の授業のための教育講座」記念講演 内田良氏（名古屋大学）

25日 ゼミナールsirube「ヤスパール」

ス 2回目

30日 研究部会

こくご講座2022 18名参加

『文法から広がる読みの世界』

斎藤章夫氏

〈8月〉

1日～3日 臨床教育学会との被災地聞き取り調査（亘理町荒浜 浪江町創成小・教育委員会 東松島市桜華小 石巻被災地）

7日～9日 東北民教研（山形県天童市）記念講演 内田樹氏

26日 第5回事務局会

31日 こくご講座世話人会

〈9月〉

3日 『教育』を読む会 研究部会

5日 ゼミナールsirube「ヴィゴツキー」

9日 第6回事務局会

10日 相談センター「不登校支援団体茶話会」

11日 道徳と教育「三浦梅園」
23日 「教育のつどい」第3回実行委員会

『教育』を読む会 研究部会

民教連代表者会

30日 第7回事務局会

「つうしん」108号発送

編集後記

6月の今年度第1回運営委員会で、高教組委員長の高橋正行さんから、「ウクライナ戦争、こういう世界情勢のとき、今までだったら高校現場から平和と戦争についての授業実践が報告されるが、今回はそういう取り組みの報告がほとんど聞かれない」という話がありました。

残念ながら、小中学校でも平和教育についての実践があまり聞かれません。ただ、宮城で使用している東京書籍の国語教科書には、4年生『世界一美しいぼくの村』や6年生の『ヒロシマのうた』という物語が採用されています。センターの学習会では、それらの教材を使って戦争と平和の問題を深く考えあつた実践も報告されています。

いま、子どもたちと「戦争と平和」をどう考え合うか、同時代の私たちの大きな課題です。伊野さんの絵本と藤田さんの一枚の写真を使った実践に学び、私は谷川俊太郎の絵本『せんそうとへいわ』を拡大コピーして1ページずつ黒板に貼り、子どもたちと語ったことを語り合いたいと思います。戦争と平和の問題、皆さんからのご意見をお寄せください。

（達）

